巻　頭　言

35年を振り返る

公益財団法人日本植物調節剤研究協会　評議員
日本農薬株式会社市場開発本部長
井ノ下　順二郎

早いもので社会人となって35年が経過しました。「植調」の巻頭言の機会を頂き，これまでの自分自身が販売した除草剤の経験を振り返りたいと思います。

私の実家は滋賀県の湖北地方のびわ町で，現在は市町村合併で長浜市となっています。見渡す限り田んぼが広がる田園地帯でしたが，両親は商売を営んでおり，父親が自宅の敷地に畑を設け，家族が食べるくらいの野菜を作るのを時々手伝ったくらいで，社会人になるまで農業とはあまり縁がありませんでした。

入社後半年間の研修を受け大阪支店に配属となり初めて担当したのは福井，滋賀，大阪です。初中期一発剤の販売が開始された頃で，慣れない講習会で冷や汗をかきながら説明し，多くの圃場で試験をさせて頂きました。最初は粒剤を散布するペースがつかめず，一反分の量を半分も行かないうちに撒き終わってしまい先輩に叱られたり，水田の土に足を取られ苗を踏んだり尻もちをついたり，今では良い思い出ですが苦労のスタートでした。それでも圃場をお貸し頂いた生産者の方から除草剤の効果にお褒めの言葉を頂き感激したことを今でも覚えています。それまで体系防除が主流であった水稲除草分野で省力化のお役に立てたのだと，農薬業界で働く喜びを感じさせてくれた瞬間でした。

その後，果樹が主体の和歌山，奈良の担当となりました。普通物の茎葉処理除草剤の普及が本格的になった時期で，シーズンに入ると来る日も来る日も展示圃試験の薬剤散布が続きました。ミカン畑の急斜面での農薬散布がこれほど大変であったとは経験しなければわからず，生産者の皆さんのご苦労を実感させて頂きました。各社の努力もあり現在では普通物の茎葉処理除草剤が主流となっています。

数年後，水稲の主産地である新潟に異動となりました。新潟では駐在をさせて頂き，海も山も近く豊富な食材や日本酒など家族共々良い思い出が沢山できました。水稲除草剤が3キロ粒剤から1キロ粒剤に切り替わり，フロアブル剤の本格販売が始まったタイミングでした。当初はフロアブル剤の効果に不安を持つ生産者の方も多く，あぜ道講習会で実演散布を数多く行いました。散布機によるフロアブル剤の散布や大型圃場での水口処理など新たな散布方法が試されました。失敗もありましたが，更なる省力化に向けて大きく前進した時期であったと思います。

次に異動した先は北海道です。最初の5年間は北海道らしい風景が広がる畑作地帯の帯広地区を担当しました。小麦，馬鈴薯，甜菜，豆類など畑作地帯ならではの作物や府県とは異なる経営規模はとても新鮮でした。異動して間もなく，小麦用除草剤と馬鈴薯用茎葉枯凋剤を販売するチャンスに恵まれました。両剤とも個性のある薬剤で，その特性を理解頂くため数多くの部会や生産者の方を訪問させて頂きました。なかには厳しいお声を頂戴することもありましたが，両剤とも当社の主要剤として現在も販売させて頂いており，畑作地帯を担当することができたことは私にとって貴重な経験となっています。

その後水稲地区も担当することになり，当時の北海道の水稲ではミズアオイを中心とした抵抗性雑草が問題となっていました。既存剤から抵抗性雑草により効果の高い薬剤に切り替えが進められている時期で，また，フロアブル剤の散布においてはラジコンボートの活用が広まるなど省力化への取組も進化してきました。幸いにも抵抗性雑草に有効な一発剤が自社から上市され，北海道での水稲除草剤販売を経験することができました。

これまで多くの除草剤販売に携わってきました。その間除草剤は大きく進歩し農業生産に貢献してきました。農薬は産業としての農業を成り立たせる上で欠かせぬ資材であり，社会貢献度は高いと考えています。SDGs等世界的な環境負荷低減への取組が始まり，農薬業界も新たな課題に直面しています。解決に向けて新たな技術を追求し，これからも生産者の皆様のお役に立てるよう努力していきたいと思います。最後に，仕事を通じて多くの方に出会い，様々な事を教えて頂きました。紙面をお借りして感謝申し上げます。